

13. 素因数分解

合成数 n を素因数分解する問題を考える。

合成数 n の自明でない約数を見つけるアルゴリズムがあれば、これを再帰的に繰り返せば素因数分解ができる。そこで、合成数 n の自明でない約数を見つける問題を考える。

n が偶数かどうかの判定は容易であり、 n が偶数のとき 2 は n の自明でない約数である。よって、以下では n を 3 以上の奇数とする。

- 素数判定と同様に、試し割算で n の約数を見つけることができる。 n を 3 以上 \sqrt{n} 以下の奇数で順に割る。もし一度も割り切れなければ n は素数だから、 n が合成数ならそれまでに自明でない約数が見つかる。ビット演算量は最悪の場合 $O(n^{1/2}(\log n)^2)$ である。
- ρ 法は次のようにして n の約数を見つける方法である。写像 $f: \mathbb{Z}/n\mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ を一つ固定する。 $x_1 \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ を一つ選び、 $x_{i+1} = f(x_i)$ ($i = 1, 2, 3, \dots$) によって x_2, x_3, x_4, \dots を定める。ある i, j に対して、 $x_i \not\equiv x_j \pmod{n}$ であるが、ある n の自明でない約数 d に対して $x_i \equiv x_j \pmod{d}$ となれば、 n の自明でない約数を見つけることができる。実際、 $\gcd(x_i - x_j, n)$ は d で割り切れるが n で割り切れないので、自明でない n の約数である。

f としてはできるだけ「ランダムに」値を移すものを用いる。例えば、 $f(x) = x^2 + 1$ が用いられる。

ρ 法は、フロイドの周期発見法を合わせて用いることで、高い確率で、ビット演算量 $O(n^{1/4}(\log n)^3)$ で n の自明でない約数を見つけることができる。

- n がほとんど同じ大きさを持つ二つの整数の積である場合に有効な、フェルマー法と呼ばれる素因数分解法がある。

n を奇数の合成数とする。 $n = ab$, $a \geq b \geq 3$ であるとき、 $t = (a + b)/2$, $s = (a - b)/2$ とおく。このとき、 $n = t^2 - s^2$ である。 a と b がほとんど同じ大きさを持つとき、 s は非常に小さくなる。そこで、 t を $\lceil \sqrt{n} \rceil$ から順に大きくしていき、 $t^2 - n$ が平方数となる t を探す。(0 も平方数と見なす。) $t^2 - n = s^2$ となれば、 $a = t + s$, $b = t - s$ によって n の自明でない約数 a, b が求まる。

- このほかにも、 $p - 1$ 法、 $p + 1$ 法、2 次篩法、数体篩法、楕円曲線法など、さまざまな素因数分解法が知られている。しかし、これらのアルゴリズムはどれも指数時間または準指数時間のアルゴリズムである。

問題

解答に際して，その問題より前にある問題の結果を用いてもよい．

13-1. $f(x) = x^2 + 1$, $x_1 = 2$ として， ρ 法を用いて 143 を素因数分解せよ．

13-2. $f(x) = x^2 + 1$, $x_1 = 2$ として， ρ 法を用いて 323 を素因数分解せよ．

13-3. フェルマー法を用いて 667 を素因数分解せよ．

13-4. フェルマー法を用いて 2257 を素因数分解せよ．

13-5. $n = 3007$ とする． t を $\lceil \sqrt{3n} \rceil$ から順に大きくしていき， $t^2 - 3n$ が平方数となる t を探すことで n を素因数分解せよ．（このように，小さな k について t を $\lceil \sqrt{kn} \rceil$ から順に大きくしていき， $t^2 - kn$ が平方数となる t を探す方法を一般化フェルマー法という．）